

2022年9月25日

## 説教「できるかぎりのこと」 マルコによる福音書 14章 1～9節

牧師 小林 恵

「空気を読む」とか「空気が読めない」という言い方があります。その場にいる大方の人たちの心の思いや考えを察知する、察知できないという意味になるでしょうか。前提としては、大方の人たちの空気が中心となります。それゆえ、もし大方の人たちの空気が間違っていたならば、場合によってはたいへん深刻な状況です。

2千年前のある日、ある出来事をきっかけに2つの空気が対峙することになりました。時は過越祭、除酵祭というユダヤ社会の大きな祝祭を直前にひかえていた時のことでした。1節はこう記していません。「さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエスを捕らえて殺そうと考えていた」。この緊迫した状況の中、思いもかけない出来事が、重い皮膚病を負ったシモンという人の家で起こります。この家で、主イエスは食事をされようとしていました。その時、一人の女性が「純粹で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた」（3節）というのです。ナルドはインド産の植物で、世界各地で愛用されていた高価な香料です。とても大事にしていたであろう香油の入った石膏の壺を壊したというので、女性は香油全てを主イエスに注いだということなのでしょう。

そこに居合わせた人たちが怒りをあらわにしました。何に腹を立てたのかというと、4節はこう記しています。「そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言った。『なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。』そして、彼女を厳しくとがめた」。人々が憤慨したのは女性の突発的な行為というよりも、むしろ主イエスに注がれた香油についてでした。1デナリオンは当時の労働者の一日の平均収入であり、300デナリオンは300日分の収入に値する額でした。

これを考慮すれば、憤慨した人たちの言い分について確かに納得できる面もあります。この世の大方の考え方からすれば、もっともな事だと思われるからです。にも関わらず、このもっともらしい空気に対して、主イエスの空気は違っていました。6節でこう言われるのです。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ」。女性をとがめるのではなく、むしろ祝福をもってその行為を受け入れ、さらに7節でこう言われています。「貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない」。

主イエスがただ一人、受難と十字架の道へと向かっていかれることがここに暗示されているように受けとめられますが、見方を少し変えてその真意をくみ取ると、このように言われているのではないのかと思います。「いつも貧しい人たちの思いと共にあるあなたがたが望む時には、彼らに良いことができる。しかし、そのあなたがたは、いつも十字架のわたしと一緒にいるわけではない。あなたがたの中で、つねにわたしの心が見出されているわけではない。」

主なる神は、つねに私たちと共におられます。逆に、私たちはいつも神と共にあるか、つねに神の御心を受けとめているのかと言えば、残念ながら必ずしもそうではないだろうと思います。あのペト

口でさえ、主の受難と十字架について、そんなことがあつてはならないと言って主イエスをいさめたと聖書は記しています（マタイ16：22）。私たちは神の御心よりも、この世の常識や価値観を優先させてしまうことがあります。主イエスは、貧しい人たちへの配慮や分かち合いを否定されているではありません。主の十字架を見ずして、この世の様々な課題や問題を自分の思いや考えのみによって解決していこうとするとき、ともすると人間の心は本当に大切なものを見失ってしまうであろうと言われているのではないのでしょうか。

教会には、信仰に基づいた奉仕があります。それは、社会常識やこの世の価値観のみにもとづくものではありません。ゆえに私たちは、教会は、ときに社会の空気と対峙せざるを得ないことがあるかもしれません。しかし大切なのは、御言葉を通して神の御声に謙虚に耳を傾け、神の御心実現のために共に祈りを合わせていくことであり、神と人に仕える者として皆で協力して教会内外における奉仕を担っていくことです。

空気を読まなかった女性の行為は、けっして無駄遣いではなく、「良いこと」でした。それは、受難と十字架の道を進んで行かれる主イエスこそ救い主であるという信仰の告白であり、このお方にすべてをゆだねて生きるという全き信頼でした。全身全霊で主を愛する一人の人間の賛美と祈り、神への奉仕が、ここにささげられていたのです。

注目すべきは、この人が、「できるかぎりのことをした」と8節で言われていることです。「できるかぎりのこと」とは、自分自身から発するまごころや心尽くしというよりも、むしろ神の愛への感謝なのだと言えます。主イエス・キリストをこの世界に与えてくださり、その貴い命をもって私たちに生きる希望をもたらしてくださる神のはかり知れない愛に心から感謝する時、私たちは何もしないではいられないのです。

人から贈り物をもって世話になったとき、私たちはお礼をし、また何らかのお返しをします。信仰生活も同じです。神へのお礼とお返しなのです。2千年前にキリストという贈り物をいただき、日々救いの恵みを与えられていることを感謝して私たちは毎週、「できるかぎりの」お礼をしているのです。まさしく、神に礼拝をささげているのです。そして、お返しとして、私たちは私たち自身をもって「できるかぎりの」奉仕を神にささげて生きているのです。

主イエスの空気を全身で受けとめながら良いことを「できるかぎり」行った女性の奉仕を、あらためて今、御言葉の中に思い起こしてみたいと思います。「この人のしたこと」を心に留めながら私たちもまた、喜びと感謝をもって精一杯神を賛美し、主のために「できるかぎり」奉仕する者でありたいと願っています。